22. 分化型甲状腺癌術後症例に対する I-131 内用療法 ——54 症例の治療経験——

西山　佳宏　中野　覚　合田真由美
余田みどり　川崎　幸子　高島　均
田邉　正忠　（香川医大・放）

分化型甲状腺癌術後 54 症例に I-131 内用療法を施行し，retrospective に検討した．対象は 1984 年 11 月から 1991 年 4 月までの 54 例で，男性 9 例，女性 45 例，平均年齢 52.6 歳，乳頭癌 47 例，濾胞癌 7 例である．方法は当科のプロトコールによった．他検査で転移巣を認めたのは 30 例で，そのうち 16 例に I-131 の集積を認めた．I-131 が転移巣に集積を認めた群は，認めなかった群よりも若年者と濾胞癌の割合が多く，サイログロブリン値は高値であった．CR 群と PR 群では年齢と組織型に差はなかったが，サイログロブリン値は PR 群が高値であった．副作用は食欲低下，全身倦怠感，吐気などが約半数に見られたが，全て reversible であった．

23. 各種悪性腫瘍の肝転移例における PIIIP, IV 型コラーゲン・7S の比較検討

阿多まり子　中村　誠治　赤宗　明久
藤井　宗　木村　良子　棚田　修二
飯尾　篤　濱本　研　（愛媛大・放）

PIIIP と IV 型コラーゲン・7S のキットを用い，基礎的検討と正常値の設定，および悪性腫瘍とその肝転移例の陽性率を比較した．基礎的検討では，同時再現性・日差再現性・希釈試験ともに良好であった．最少検出濃度は，PIIIP が 0.03 U/m*l*, IV 型が 2.0 ng/m*l* であった．Cut off 値は PIIIP を 0.7 U/m*l*, IV 型は 6.0 ng/m*l* とした．悪性腫瘍とその肝転移例の比較は，PIIIP は全体例と転移例ともに陽性率が高く，IV 型は転移例で陽性率が高かった．両キットの測定値の相関係数は 0.806 であった．

24. 金製剤による間質性肺炎の 1 例 ——核医学的検討を中心に——

橋村　伸二　河野　良寛　新屋　晴孝
清水　光春　竹田　芳弘　平木　祥夫
（岡山大・放）
水戸川剛秀　西谷　皓次　太田　善介
（同・三内）
中村　哲哉　粟井佐知夫　荻野敬一郎
（国立岡山病院・放）

症例は 56 歳，男性．慢性関節リウマチ (RA) としてシオゾール総計 265 mg 投与を受けていた．RA による関節症状が比較的安定していた時期に，労作時呼吸困難が出現し，次第に増強．同時に全身性皮疹も出現し，胸部単純 X 線写真にて両肺野の特に上中肺野に粒網状影を主体とし，粗大な線状影の混在する像が認められた．金製剤による間質性肺炎 (いわゆる gold lung) と診断された同症例に対し，^{67}Ga シンチグラフィーおよび ^{201}Tl シンチグラフィーを施行．特に ^{201}Tl シンチグラフィーにおいて，胸部レントゲン写真上の微細な経時的変化が，RI 集積の明瞭な差として示され，本症例に対する ^{201}Tl シンチグラフィーの有用性が示唆された．

25. 放射線肺炎における ^{99m}Tc-DTPA 肺シンチグラフィーの有用性

有吉　功　菅　一能　中西　敬
（山口大・放）
宇津見博基　山田　典将　（同・放部）

^{99m}Tc-DTPA が静注後速やかに血管外間質に分布する性質を用いて，広義の放射線肺炎症例 11 例に対して肺シンチグラフィーを試み，その有用性について検討した．

^{99m}Tc-DTPA を静注，30 分間動画像を収録後，3 分間の静画像を得た．病変肺野，正常肺野，心臓での時間放射能曲線と，各肺野と心臓の経時的な放射能比を検討したところ，病変肺野での時間放射能曲線の初期の傾きは緩やかとなり，肺野／心臓比の曲線のパターンは 3 型に分類しえた．また静画像上の視覚的評価も可能であった．

以上の結果から，^{99m}Tc-DTPA 肺シンチグラフィーにより，放射線肺炎の病態を短時間に評価しうる可能性が示唆された．

Presented by Medical*Online